

平成 25 年度第 2 回弘前市立郷土文学館運営委員会会議概要

日 時 平成 26 年 2 月 28 日（金） 午後 2 時 27 分 開会

午後 3 時 45 分 閉会

場 所 弘前図書館 2 階会議室

出席者 委 員 齋藤三千政 委員長 片山 良子 副委員長
安田 俊夫 委員 小田桐好信 委員
(欠 席) 山本 和之 委員
郷土文学館 館 長 桜庭 哲紀 館長補佐 小山 秀樹
主 幹 三上 淳 主 査 若城真佐人
企画研究専門官 館田 勝弘

会議次第

- 1 開 会
- 2 委員長あいさつ
- 3 会 議
 - (1) 平成 25 年度事業実施状況について
 - (2) 郷土文学館の利用状況について
 - (3) 平成 26 年度事業計画等について
- 4 その他
- 5 館長あいさつ
- 6 閉 会

事務局 ただいまから、平成 25 年度第 2 回弘前市立郷土文学館運営委員会を開催します。
まず初めに、委員長からごあいさつをお願いします。

委員長 皆さん、お忙しいなか、ありがとうございました。

1 月の成人の日に、今盛んになっているらしい「ビブリオバトル」というものをラジオで聴いて、これはおもしろいと思いました。

ビブリオというのはラテン語で「書物の」とか「本の」とかという意味で、「本の戦い」というのはどういうことかということ、ルールとして 4 つある。

まず 1 つ目は、自分がある本を薦めるためのプレゼンテーション。2 つ目は、時間が 5 分以内。3 つ目は、その発言者のプレゼンテーションが終わったら、2、3 分質疑応答をとる。4 つ目が、そこに参加した人たちが 1 票の権利を持っていて、これを投票して、誰がいちばん本の紹介がうまく、本を読みたくなった発表だったかを 1 人決めるというものです。

ラジオを聴きながらふと思ったのは、例えば郷土文学館あたりで、いつも北の文脈文学講座を行うラウンジで、こういうバージョンを——「ビブリオバトル」とタイトルづけてしまうとルールに従わなければならないので、とりあえず変則バージョンとして、例えば解説員が来館者に対して「これがいちばん私の薦める本ですよ」とか「太宰のこれがいち

ばんいいですよ」とか、そういうトークでやると意外にまたいいのではないかとということでした。

次いで、全国学校図書館協議会の25年度の調査で、5月の1か月で本を1冊も読まなかったと答えた高校生が45%であるという。この前開かれた図書館協議会でも入館者数や貸出し冊数が少なくなっていて、ここ3年間減ってきている状況があるということがありました。そういうなかで、われわれ運営委員会でも、何かきっかけがあれば、それを皆で考えていくのも1つの方策ではないかと感じたところです。

事務局 本日の会議には5名の委員が出席しております。

会議の進行は、委員長が議長となり進めさせていただきます。

委員長 ただいまから、平成25年度第2回弘前市立郷土文学館運営委員会を開会いたします。

委員長 それでは、本日提案されております案件について、事務局より説明を願います。

〔案件1 平成25年度弘前市立郷土文学館の事業実施状況について〕

配付資料に基づき、平成25年度郷土文学館の事業計実施状況について事務局から説明。

- ・事業実施状況（展示・企画展記念行事）
- ・文学館資料収集状況（購入・寄贈・編入資料）
- ・郷土文学館企画展・記念講演会開催状況一覧

委員長 案件1について、御質問、御意見等ありませんか。

〔質疑なし〕

委員長 次に、案件2について、事務局より説明を願います。

〔案件2 弘前市立郷土文学館の利用状況について〕

配付資料に基づき、郷土文学館の利用状況について事務局から説明。

- ・平成25年度月別及び年末年始観覧者数
- ・郷土文学館利用状況の推移
- ・企画展別観覧者数調べ

委員長 案件2について、御質問、御意見等ありませんか。

委員 去年の人数が、宣伝もやっているはずなのに、前年に比べると半分ぐらいしかなかったというのは、資料を見てびっくりしたが、何か要因的なものはあるのか。

館長 特に明確な理由は見当たらないが、ただ、24年度企画展のテーマの魅力というか、そこが如実に表れているのかなというふうに思っている。長部日出雄の「直木賞受賞40周年」展の前は寺山修司展であった。郷土文学館の今までの企画展の内容を見ると、太宰治と寺山修司の2人がかなり興味を持って見られている部分があって、たまたま前年と比較すると、かなり少なくなったとは数字的に言えるが、人気がある作家と、今の段階でそこまでない作家とか、さまざまな状況があつてのことだと思うものの、特段そのほかにこれが理由で少なくなったとかというのは、特に思い当たるものはない。

委員 確かに企画展の平成21年度からの人数だけを見れば、太宰と寺山が突出している。その寺山の次にやったのが半減というのは、これはちょっと比較しがたいかもしれない。今の

学生は本を読まないというのはさっき紹介したが、太宰の代表作を 1 つ挙げよという問題を与えると、とんでもない作品が出てくる。太宰ですらそうなのだから、いわんや今官一なんていうのをやると、ほんとにお手上げになる。1%もいかないだろう。確かに太宰と寺山は別格である。若い人たちは、作品を読んでいるかどうかは分からないが、とにかく名前だけは絶対に知っている。それにテレビでも取り上げているし。そのほか何か原因として思い当たるようなものはないか。

委員 気象も影響していると思う。天気の関係でやたらに雪が多かったり、夏だと暑かったりすると、出かけようとする気が半減する。寺山のときと長部のときの夏場では同じようだったが、逆に寺山のときはよく人が集まったと思う。5,000 人も集まったわけだから。

委員 いろいろな要素が考えられるが、しかし、この決定的な原因は何かというのは難しい問題でもある。

委員 去年の場合、長部先生に関しては陸奥新報にも企画記事が出たし、東奥日報にも毎週連載が出ていたわりには、どうしてこうなのかちょっと信じられないのであるが、人数を見ると、小・中学生があまりにもやはり入館が少ないのかなという感じがして、関心の少ない作家なのかと思う

委員 この観覧者数には講演会に来た人数も含まれているか。

事務局 入っていない。

委員 ある意味、それも人数のうちである。

委員 講演会はすごかった。

委員 満席になった。せっかく新聞にああいうぐあいに出たのに、それが結びつかなかったと考えると、ちょっと残念だと思う。

委員 先ほど学生が本を読まなくなったという話が出たが、ことは去年よりもっと広がっている。ただ、けっこう電子図書では見ているようだが、それは数字に出てこない。

事務局 今も話があったように、長部日出雄は地元にとっては大変大切な作家であるが、意外と地元の人が来てくれなかったという気がしている。10 年ぐらいのサイクルで企画展で取り上げてきたので、そういう意味では前に見たものだという判断があったのではないと思う。直木賞をもらってから 40 年ということで、もう過去の作家だという言い方もされてびっくりしたことがあるが、われわれの宣伝のほうももう少し工夫しなければならないと反省はしている。

館長 ちなみに資料に記念講演会の一覧を載せているが、講演会はこれまで図書館の視聴覚室でやってきていて、今までの傾向を見ると、ここで講演を聴いた後、ちょっと見てみようかと文学館にも足を運んだお客様もいたという話を聞いている。

ただ、今回はヒロロで行って、このヒロロの 250 人というのは資料の総観覧者数には入っていないが、郷土文学館の事業そのものに参加した人数ということでいけば、この 3,300 人にあと 250 は少なくとも加わってくることにもなるので、長部さんに興味のある市民の方々は別にそう少ないわけではないと考えている。

委員 そうすると、総観覧者数の横にもう 1 コマつくればいいのではないか。

委員 確かに図書館の視聴覚室でやると、隣の文学館の展示を見てみようということはある。

館長 実はそれがこちらの狙いで、文学に興味を持ってもらって、文学館の展示も見てもらい

たいと、そういうことにつながればいちばんいいと思っている。

委員 市民会館が新しくなり、長部さんの講演会があって、すごく大勢の人が来ていた。その数はここには出てこないのか。

館長 市民会館でやったのは、同じ市であるが、あれは市民会館のリニューアルのこけら落としの事業だったので、教育委員会の文学館の事業としてではなかったものである。

委員 けっこう多かったそうである。分散したのかなとも思うが。

館長 そうかもしれない。

委員長 文学館のほうでもいろいろと企画展のネームバリューの問題もあるし、いろいろな工夫をしてこれからやっていくと思うが、われわれも何かいい知恵があったら、事務局のほうに提案していきたいと思う。

委員長 次に、案件3について、事務局より説明をお願いします。

〔案件3 平成26年度弘前市立郷土文学館の事業計画等について〕

配付資料に基づき、平成25年度郷土文学館の事業計画等について事務局から説明。

- ・事業計画案（展示・企画展記念行事）
- ・歳出予算（案）
- ・事業別予算案内訳

委員長 案件3について、御質問、御意見等ありませんか。

事務局 補足するが、スポット企画展のスケジュールで、「作家が描いた津軽——昭和——」とあるところを「昭和Ⅰ」と訂正する。というのも、昭和を1回でやろうと計画したが、人数が多くて1回でできないことが分かった。パートⅠは昭和の初めから20年代前半までという形で開催したいと、今、準備している。パートⅡは来年になろうかと思う。

委員 事業別予算のなかの来年行われる陸羯南展であるが、印刷製本費とその他委託料のところが突出しているような感じがする。内容などはもう決まっているのか。

事務局 委託料のほうは、毎年そうだが、展示物を業者のほうにキャプション等の製作を委託し、それで開催している。それがここの委託料であるが、そのなかにはビデオの製作なども入っている。印刷製本費のほうは、今回3回目の図録を出すことになったものの、今まで図録というものがなくまきで幾久しいのであるが、今回初めて印刷製本費という形で予算化された。これは図録に係る印刷製本費である。今回の場合は、27年の陸羯南展の図録の印刷費を見たものである。つまり、高木恭造展の分は今年度25年度の予算でやって、26年度は陸羯南のものだけとなる。「年」と「年度」で紛らわしいが。

委員長 会議次第4「その他」について、御意見等ありませんか。

委員 入館者数のことであるが、徐々に人数が減ってきていることについては残念に思っている。特に23年度から25年度の3か年を見てみると、小中学生のところは、22年度364人であったものが、23年度86人、24年度203人、25年度250人。この辺を見て、せつかくの郷土文学館が設立された当初の目的というものを考えると、地元の郷土の子どもたちに、こういう地元出身の文学者たちもいるのだということを知らしめるということが大切な事業内容だと思うのである。その辺は、職員が小中学校に対して、ここを有効活用してほし

いということをもっと宣伝、リクルートするとか、そういうことが必要なのではないかと思う。

例えばここを見学してもらいたいということで、それで来てくれた場合に、受け入れ態勢として津軽方言詩の朗読を誰かがすると。例えば劇団弘演劇の団員をボランティアで出してもらって、津軽方言詩の朗読をすとか、そういうふうにタイアップできるような事業がいっぱいあると思う。そういうことで、例えば1クラス30人、2クラス来て60人だとして、そのなかの1人でも2人でも方言詩というのはおもしろいものだなと感激してくれる人がいれば、大変いいことではないかと思う。これは方言詩に限らず、いろいろな展示のなかからどこか1つは印象に残るような説明をしてもらって、小中学生の方たちに伝えてもらいたいと思うが、どうであろうか。

委員 これは文学館もそうだし、図書館の利用状況でも貸出冊数、貸出し者数の減がある。これはたぶん1つには、小中学生の場合はこれから学校とのタイアップということを念頭に置かないと何とも言えないが、小学校、中学校との、同じ教育委員会のなかでの連携という視点で考えると、なんとか働きかけできるような気がしないわけではないが。

館長 今までは、郷土文学館として学校と連携したものはなかったような気がするが、その辺、今、提案があったので、学校で学校行事と絡めた形で追手門広場や弘前公園へ来たときに、文学館として特徴のあることができないかということは、いろいろと考えてみる必要があると思う。離れている学校だと、どうしてもここまで来るのに、学校として団体で動くにはバスを借りる必要があるとか、特別それだけのためにというのは難しいかもしれない。公園へ写生大会とかに来るとき、それにプラスして一緒に来られるような機会がつかれないものか、学校のカリキュラムのなかでその辺のところを連携してできるものがないか、少し教育委員会のなかでも話を聴きながら検討してみたい。

確かに子どもたちの来館者数は少なくなってきた。大人もそんなに多くなくて、だんだん少なくなってきたのは気になるが、子どもたちのほうは新たに着目して検討していかなければならないと思う。今、展示されている文学者はどうしても子どもたちにはなじみのない部分が多いかと思うので、その辺をどう工夫できるか、難しいところもあるかもしれないが、考えてみたいと思う。

委員 これは青森県近代文学館ではすでにやっていたと思うが、例えば展示をやる。展示やって、もちろん大事な資料とか借用したものとかはできないが、パネルなどを各学校へ何点か持って行って、こういうのがありますよと作家を説明したものをどこかに展示してもらおうというのも、それはお金のかかることじゃないから、こっちでやったものを捨てるのはもったいないからという感じで、それはできないわけではない。

それをきっかけに交流やコンタクトをとるという方向も考えられる。高校の文化祭あたりへこれを持って行って説明したりなどすれば、もちろん学校側の事情もあり、カリキュラムも年間びっちり決まっているから、なかなかそれを崩すというのは容易でないことは重々承知しているが、展示だけでもしておけば目に触れることは確かである。「おっ、これなあに」という感じで、それを1つのきっかけにすれば、文学館でこういうことをやっているなということだけでもこっちに目を向けてもらう方法、手段になるのかなと。

私がいちばんおもしろいと思うのはポスターである。あのポスターを有効活用してやれ

ばいい。例えば「まるめろ」。まるめろと言っても県外の学生は知らない。ところが、これが弘前駅のどこかに張られているそうだが、私がこの前講義でこのチラシを見せたら、「どこかで見たことがある」と言ってきた学生がいる。この学生は岩手県出身なのだが、ポスターを駅でいつも見ているという。彼は駅の近くに部屋を借りている学生で、電車を使って通っている。それで目に入ったらいいのだが、視覚に訴えるポスターというのでもいいな、ポスターやチラシというのも有効な手段だなと、つい最近そういう例もあった。小中学校の廊下とか昇降口とかに張ってあれば、それも一つの方法だろうと。

委員 ここ文学館でやっているというだけでなく、いわゆる売り込みというものがある。一般企業であれば、お客さんが入らなければ倒産する。だから漫然とやっているのではなく、外部に積極的に売り込む必要を感じてほしい。

事務局 年度の初めには小学校、中学校の校長会とかで郷土文学館の利用をしてほしいということを経長のほうから毎年説明をし、資料を配布してやっている。そういう意味では、数は少ないが、けっこういろいろな機会に顔を出していることは出している。

また、この辺の朝陽小とかは歩いてこられるが、それ以外はやはり交通の状況が大変なことだから、結局バスとかを利用しなければならないために、学校としてここへ来るのがかなり厳しい状況だというのは確かにあるのではないかな。

それから、いわゆる移動展について、これをやるには印刷機が不足しているので、自前でできない状態があるが、なんとか工夫する必要があると思っている。

委員 文学そのものは皆古いものだから、今新しい、とりあえず太宰と寺山とかをドーンと持って行って、どうだとやればどんなものか。小中学校の子どもたちが1回足を運べば、これは将来すごくいいと思う。成長に及ぼす影響というのは計り知れないものがあると常日頃感じている。

それから、図書館協議会のときに『文集はと笛』をもらったが、応募数がすごく、そこはびっくりしたが、ただ、そのなかで1つ気になったことがある。ある中学校が集中的に多い。作品が多いだけでなく、入選数もすごく多い。その中学校というのは市立の中学校ではない。市立の学校でも多いところはあるが、9割方も数の相違があるというのは、これはやはり取り組みの姿勢が反映されているのではないかな。

そこから読み取れるものはやはり国語の教員だけではなくて、学校全体がそういう子どもの将来をどう考えるかという、長いスパンで成長過程を見守っていくという視点を持つ指導者や姿勢が必要だなと、そういうところを図書館が学校指導課などの関係機関と情報を交換する機会があれば、半歩でも一歩でも前進するような気がする。

委員 津軽弁の日とかがあるがも、今の学校の教師自体が津軽弁を知らないのである。それも要因の1つではないかな。私もおばあちゃんの津軽弁が分からない世代に入ってきている。現代文を添えなければ、もう分からない子どもたちになってきている。そこも要因ではないかな。また、方言というのは耳から聴かないと分からないので、若い人には活字だけでは起き上がってこない。だから、もっとどこかで「んだ」「ねは」というのが耳に入れば、もっと興味を持ってくれるような気がする。方言というのは音声で伝わる言葉である。その工夫も必要なのではないかなと思う。

委員 音声というのも、また、耳からの文学というものもある意味大事かもしれない。文字言葉

だけではなくて音声言葉とか。若い人たちは逆に音声から入ってくるかもしれない。

委員 しかも、この方言詩は、子どもたちにとっては活字だけでは分からない。ソノシートがあれば聴くだろうが。

事務局 今回、実はビデオを作り、方言詩コーナーのところで聴けるようにしているが、これは高木恭造自身が自作詩を朗読しているのが入っているものである、三上寛の伴奏で。レコードの版もあるが、その映像も入っているやつをビデオにして用意した。今回の企画展の目玉にもしている。

それから、先ほどの図録の件について補足するが、図録はこれまでに 3 冊作った。それを業者からはデータでももらっている。今のところ業者で使っているソフトが事務局のものとは違って、パソコンでは見られない状態であるが、これを解析できるソフトがあれば画像化することは可能である。それができれば、小学校などにも大きくして持っていけるとか、そういうことができると思う。

委員長 ほかにありませんか。

館長 委員のほうからほかになければ、事務局から 1 点お伝えしたい。

この運営委員会というのは、郷土文学館の運営上のさまざまな参考になる意見を懇談会的に委員から聴き、いくらかでも運営に反映したいということで、教育委員会では教育長の決裁による設置要綱に基づいて、今、組織として設置している。

先般、市ではこれら懇談会等を見直しして、正式に市の附属機関、審議会としてももう少し権限を大きくし、市からの諮問に対して答申や建議をしてもらい、そこで出た意見をしっかりと市でも受け止めるためにも、条例で規定をすることになった。

市全体で見直しをした結果、郷土文学館運営委員会も設置要綱で設置するのでなくて、市の条例で規定した審議会として運営していくことになり、今、開会中の 3 月議会に郷土文学館条例の一部改正を提案しているものである。

〔配付の「新旧対照表」に基づき、改正案について事務局から説明〕

館長 なお、条例に基づく附属機関になったときに、この条例案には出てこないが、委員報酬が若干上がる。委員長が 10,000 円から 12,100 円、委員が 8,000 円から 10,000 円となる。

今後とも事務局として文学館に関しての伺いたいことをきちんとした議案として提出し、今までより以上にいろいろ協議してもらい、その意見を十分加味して運営に生かしていきたいと考えている。

委員長 ほかにありませんか。

〔発言する者なし〕

委員長 ないようですので、これをもちまして本日の日程はすべて終了いたしました。

委員長 郷土文学館長よりあいさつがあります。

館長 (あいさつ)

事務局 これをもって平成 25 年度第 2 回弘前市立郷土文学館運営委員会を閉会します。

【弘前市立郷土文学館事務局作成】